現地で活動した国際要員の声

紛争・難民×緊急保健コーディネーター

日本赤十字社中東地域首席代表
兼　国際赤十字・赤新月社連盟　緊急保健コーディネーター
五十嵐　真希
最新の派遣先：レバノン（姉妹社／連盟）

プロフィール紹介

山梨県生まれ。本社所属。

派遣歴：インドネシア・東ティモール（2007～2008年）、ケニア（2008～2015年）、レバノン（2015年～現在）

国際要員を目指したきっかけ

実際に人道支援に携わりたいという思いが芽生えたのは30代になってからです。ニューヨークに引っ越した友人を訪ねた旅行の帰路、2001年9月11日0時15分に日本へ向けた飛行機に乗り込みました。日本の自宅に着いてテロが起きたことを知り、「あの時、残っていたら救援活動できたのに」と思いました。翌日、アメリカ留学を決めました。元々、薬剤師として働いていた頃にこころのケアについて学びたいと思っていたこともあり、この経験は決定打でした。大学院に通いながら赤十字のボランティアを始めたのは、2005年、ハリケーン・カトリーナの時です。今度こそ「なにか自分の学びを活かして人を助けられないか」と、いくつかの団体のインターンに応募。縁あって、アメリカ赤十字社（以下、アメリカ赤）から声をかけてもらえました。

国際要員として登録されるまでの道のり

実は、日赤ともアメリカ赤でのインターン時代に運命的に出会いました。今の日赤の社長と国際部長が災害対応の視察でアメリカ赤のニューヨーク支部を訪問していて、たまたまお話することができました。その時、日赤の存在を知り、それからインターネットで日赤主催のBTC研修（現IMPACT研修）を見つけ、一時帰国して研修を受け、国際要員として登録されました。

現地での活動のやりがいは？

アメリカ赤のボランティアとして活動を始めた頃は、ニューヨーク州の大規模な火事や洪水の発生時に、被災者に水を配ったり、子どものこころのケアのためにクレヨンや絵具を集めるところからスタートしました。国際要員になってからは、ひとつの「プロジェクト」を受け持って現地の人の命と笑顔に向き合い、

今度は「地域」を担当するようになって、次第に、他団体との連携や、資金を集めることにも深く関わっていきました。たとえば、資金集めは、ただ寄付をお願いするだけじゃなくて、プロポーザルを書いて日本政府からお金をいただいたり、WHOやユニセフなどの国連機関と連携することで日赤だけでは叶わない支援ができたりということです。経験を重ね、チームを任されるようになって立場が変わっていくことで、届けられる支援や対象が広がっていったことは嬉しいですね。

今後の目標

「次世代を育てる」ことにもっと貢献していきたいです。裾野が広がってきた日赤の人材の能力を、さらに上へあげていくような野望を持っています。これまで私は海外で十何年も仕事をさせてもらってきたけれど、これで終わっちゃいけない。いろんな種を蒔いてきたけれど、水やりが足りてなかったことも、状況が許さなかったこともあります。世界の赤十字のなかでも、日赤って逸材だと思うんですよ。国内でもこれだけ大きな組織として多岐に渡る分野で活躍している。素晴らしい人材が国内外で活躍できるようにしていけたらいいなと思っています。

関連記事

- 中東に日本赤十字社代表事務局を設置（2016年2月29日）
- 中東：五十嵐真希と日赤中東地域代表部 アラブのなかの日本の美　～石の上にも4年！～（2019年2月27日）